

東院南方遺跡の発掘調査（平城第 667 次調査）

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

都城発掘調査部（平城地区）

調査地：奈良市法華寺町

調査期間：2024年11月25日～12月27日

調査面積：約162.5㎡

調査終了後のため、現地公開はありません

概要

平城宮の南東に位置する東院南方遺跡の中心部について、初めて学術的な発掘調査に着手しました。

今回の調査では当該地を4坪に区画する形から、それら4坪を一体で利用する形へと土地の利用形態が大きく変化することがあきらかになりました。平城宮直近の一等地であり、平城宮の形の謎を解く鍵を秘めた当該地の重要性が一層あきらかになりました。

1. 調査の経緯と目的（図1、2）

これまでの調査成果

東院南方遺跡は平城宮の南東に位置し、平城京左京二条二坊三・四・五・六坪にあたります。平城宮の東側は北側の四分の三が東に張り出し（東院地区）、その南にあたる宮の東南隅を切り欠いた形ですが、東院南方遺跡はその切り欠いた部分にあたります。

東院南方遺跡ではこれまでに東南部で発掘調査を多くおこない、複数時期にわたる堀や溝などの区画施設などを検出しています。その中でも第198・204次調査において二条大路上で検出した濠状遺構SD5300から出土した木簡（いわゆる「二条大路木簡」）には皇后宮職や藤原麻呂の家政機関に関わるものが多く含まれており、東院南方遺跡に藤原麻呂邸が所在したとの説があります。一方で東院南方遺跡の位置から『続日本紀』の天平勝宝元年（749）十二月にみえる「宮南梨原宮」の所在地とする説もあります。

調査の目的と概要

東院南方遺跡は、東南隅を切り欠いた平城宮の形の謎を解く鍵を秘めた遺跡です。しかしこれまで中枢部の発掘調査はおこなわれておらず、その全貌は不明でした。

そこで奈良文化財研究所では東院南方遺跡の実態を学術的に解明するとともに、将来的な遺跡の保存活用を一層促進するための事業に着手することとしました。今後数年をかけて発掘調査等を実施する予定です。

東院南方遺跡全体の土地の利用形態をあきらかにするため、本年度の発掘調査は東院南方遺跡の中心部に南北 8 m、東西 20 m の調査区を設定し実施しました（東南隅は一部拡張）。令和 6 年 11 月 25 日に調査を開始し、12 月 27 日に終了しました。

2. 主な検出遺構（図 3）

（1）奈良時代前半の遺構

二条条間南小路および南・北側溝

調査区内を東西に通る道路です。調査区内のほぼ全面にわたり検出しました。路面部分と南・北の両側溝からなります。いずれも奈良時代前半に造られ、奈良時代中頃には全面的に埋められ機能を失いました。

二条条間南小路 路面幅は約 5.0 m です。一部で路面の舗装とみられる砂質土が残っていました。調査区西端付近で後述の二坊坊間西小路と合流し、交差点をなします。

二条条間南小路北側溝 溝の幅は 2.0～2.7 m です。深さは調査区西端で約 70 cm、東端で約 45 cm です。調査区西端付近で後述の二坊坊間西小路東側溝と合流しますが、交差点を越えてさらに西へと続きます。溝の中からは土器・瓦・木簡が出土しました。

二条条間南小路南側溝 調査区東南隅の拡張区で検出しました。溝の幅は約 2.2 m とみられます。深さは約 65 cm です。

二坊坊間西小路および東側溝

調査区西北で検出した南北道路です。二条条間南小路と合流し、交差点をなします。奈良時代前半に造られ、奈良時代中頃には全面的に埋められ機能を失いました。

二坊坊間西小路 南北約 1.4 m 分を検出しました。二条条間南小路との交差点では二条条間南小路の北側溝がそのまま西へと続くため、二条条間南小路とは直接はつながりません。本来は橋などがかけられて一体的に用いられたものと想定できます。

二坊坊間西小路東側溝 溝の幅は約 2.1 m で、深さは約 60 cm です。二条条間南小路北側溝と逆 T 字状に合流します。溝の中からは土器・瓦・木簡が出土しました。

（２）奈良時代半ば以降の遺構

いずれも二条条間南小路および二坊坊間西小路の廃絶と全面的な整地の後に建てられた建物です。

南北柱穴列

調査区西端で検出した南北に並ぶ柱穴列です。３基を確認しました。掘方は一辺 1.1～1.2 mで、深さは確認した南端のもので 1.1mです。約 3.0m（10 尺）の間隔で並びます。調査区の北・西・南へと続く大型の掘立柱建物の一部と考えられます。

南端の 1 基について掘方内部の確認をおこなったところ、柱を据え付ける掘方の底に 3 本の角材を並べていたことが分かりました。角材の大きさは長さ 90～101 cm、断面は約 9 × 11 cmです。柱の沈下を防ぐため、柱掘方内での地盤改良のような目的で用いられた可能性が想定できます。

東西柱穴列 1

調査区東北端で検出した東西に並ぶ柱穴列です。４基を確認しました。掘方は一辺約 0.7 mで、約 2.7m（9 尺）の間隔で並びます。東西棟の掘立柱建物または東西方向の掘立柱塀の可能性が考えられます。

東西柱穴列 2

調査区中央北端で検出した東西に並ぶ柱穴列です。３基を確認しました。掘方は一辺約 0.7mで、約 2.4m（8 尺）の間隔で並びます。南北棟の掘立柱建物の南妻と考えられます。東西柱穴列 1 と近い位置にあることから異なる時期に用いられたとみられますが、その前後関係は不明です。

柱穴 1

調査区西北隅で検出した柱穴です。掘方は一辺約 1.1mで、深さは 1.0m以上です。現状で 1 基のみを確認しており、調査区西北外に続く掘立柱建物の東南隅の柱穴とみられます。

３．主な出土遺物

今回の調査では、奈良時代の土器類、瓦磚類、木器、木簡などが出土しました。瓦磚類には軒丸瓦 19 点、軒平瓦 15 点があります。木簡は 43 点（うち削屑 29 点）が出土しました。

4. まとめ

(1) 東院南方遺跡の遺存状況把握のための本格的な発掘調査にはじめて着手しました

平城宮の謎を解く重要な鍵となる東院南方遺跡の中枢部について、学術的な発掘調査にはじめて着手しました。道路の路面に近い部分や整地土が残っていること、検出した柱穴が深いことから奈良時代の遺構は後世にほとんど削られず良好に残っていることがあきらかになりました。道路側溝を一部掘削したところ多くの木簡が出土し、柱穴底からは良好な状態の角材が出土するなど、有機物をはじめとする資料の遺存状態も極めて良好とみられます。

このように東院南方遺跡の保存状態は極めて良好であることがあきらかになりました。

(2) 東院南方遺跡の大きな土地利用形態の変遷があきらかになりました

平城宮・平城京の造営当初は東西および南北の道路で土地を坪ごとに区画して利用していたこと、奈良時代の半ばには4坪を一体として利用する形態へと大きく土地利用形態が変化したことがあきらかになりました。

具体的な利用方法は今後の調査であきらかにしていく必要がありますが、平城宮直近の土地として、奈良時代半ば以降は通常の宅地とは異なる格式の高い土地として利用されたことが推測されます。

以上のように、東院南方遺跡は4坪が一体で利用された平城京内でも重要な場所であったこと、それが今日まで良好に保存されている場所であることがあきらかになりました。

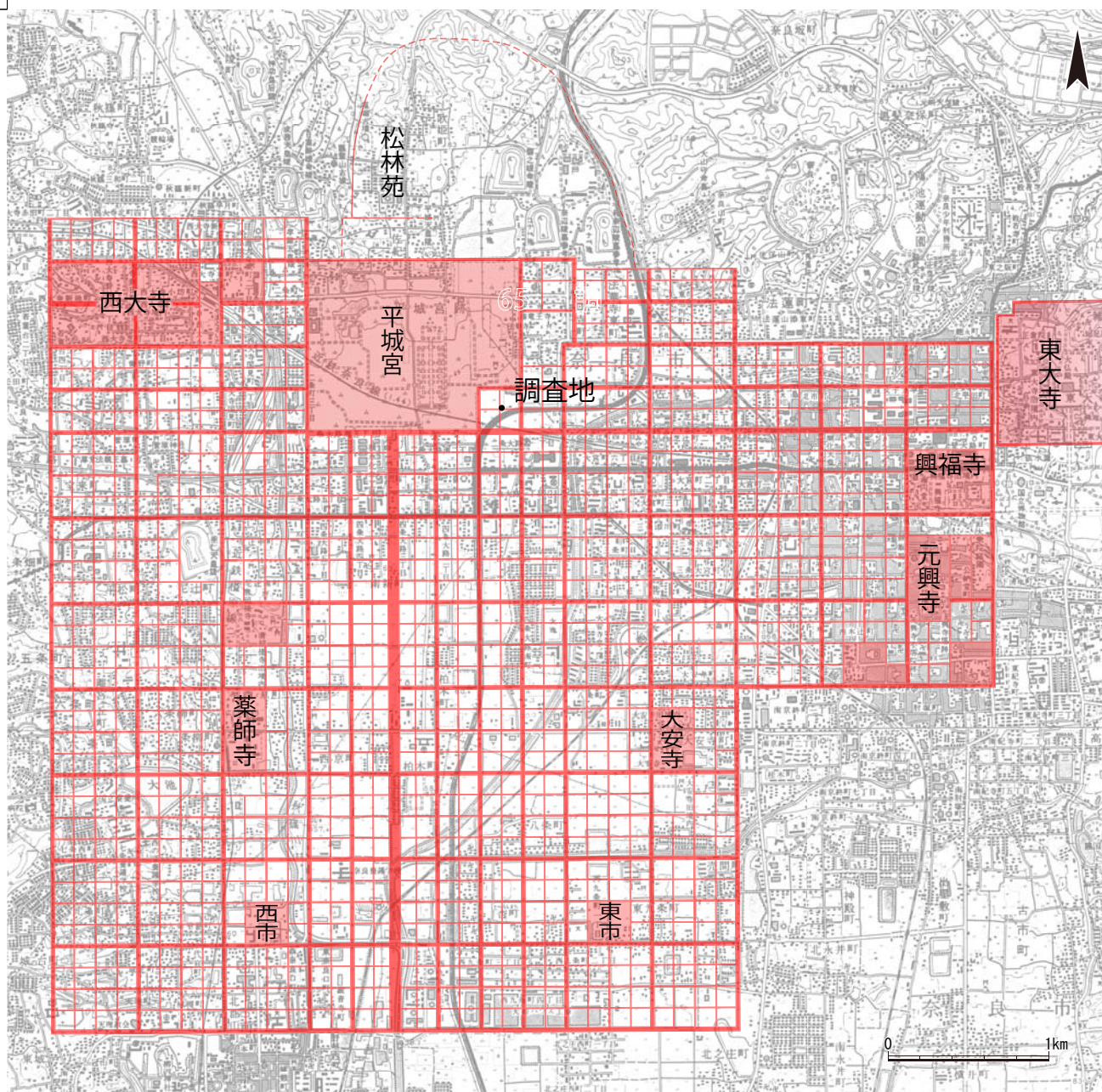


図 1 調査地点位置図（平城京）

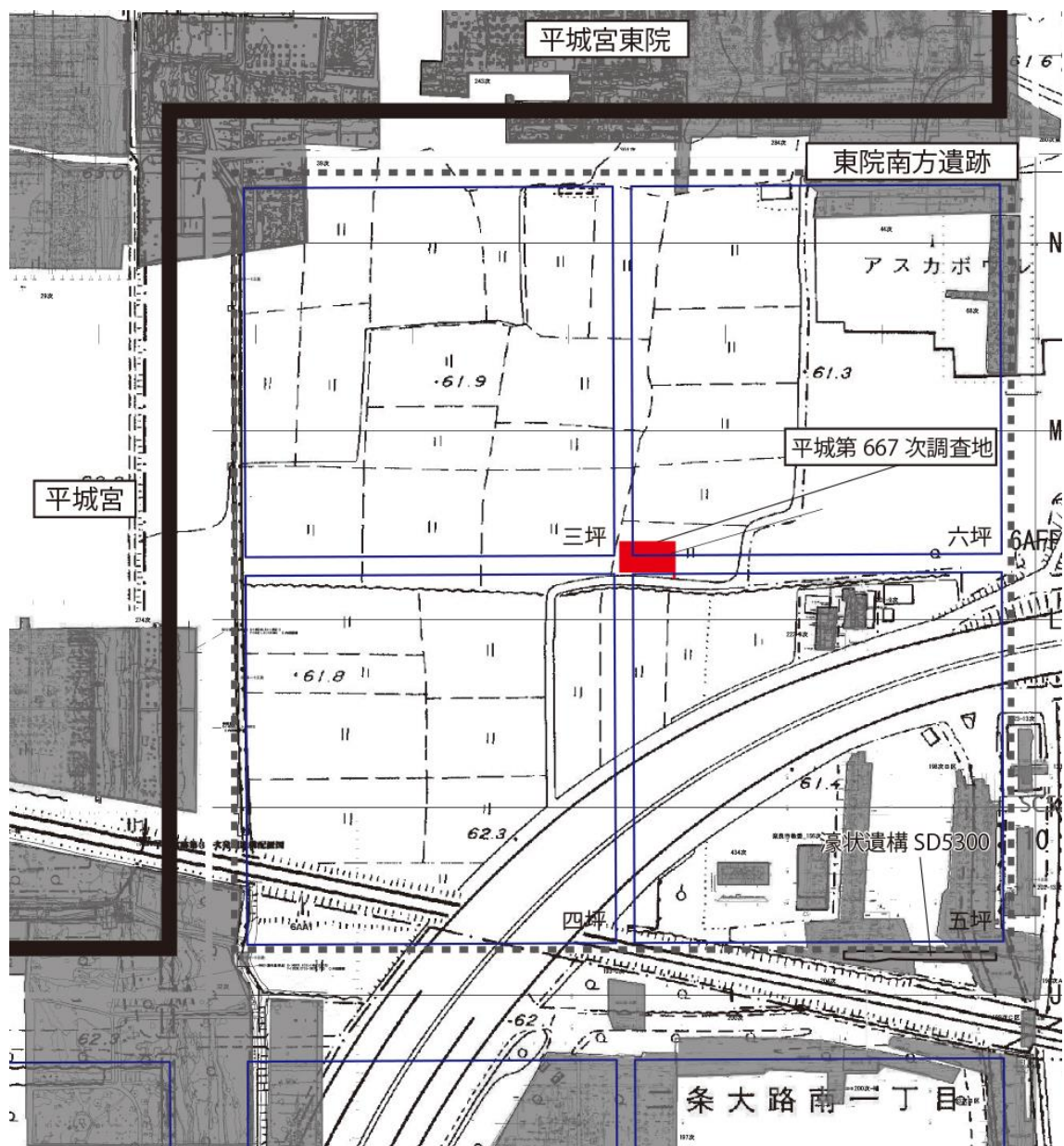


図 2 調査区位置図（左京二条二坊）

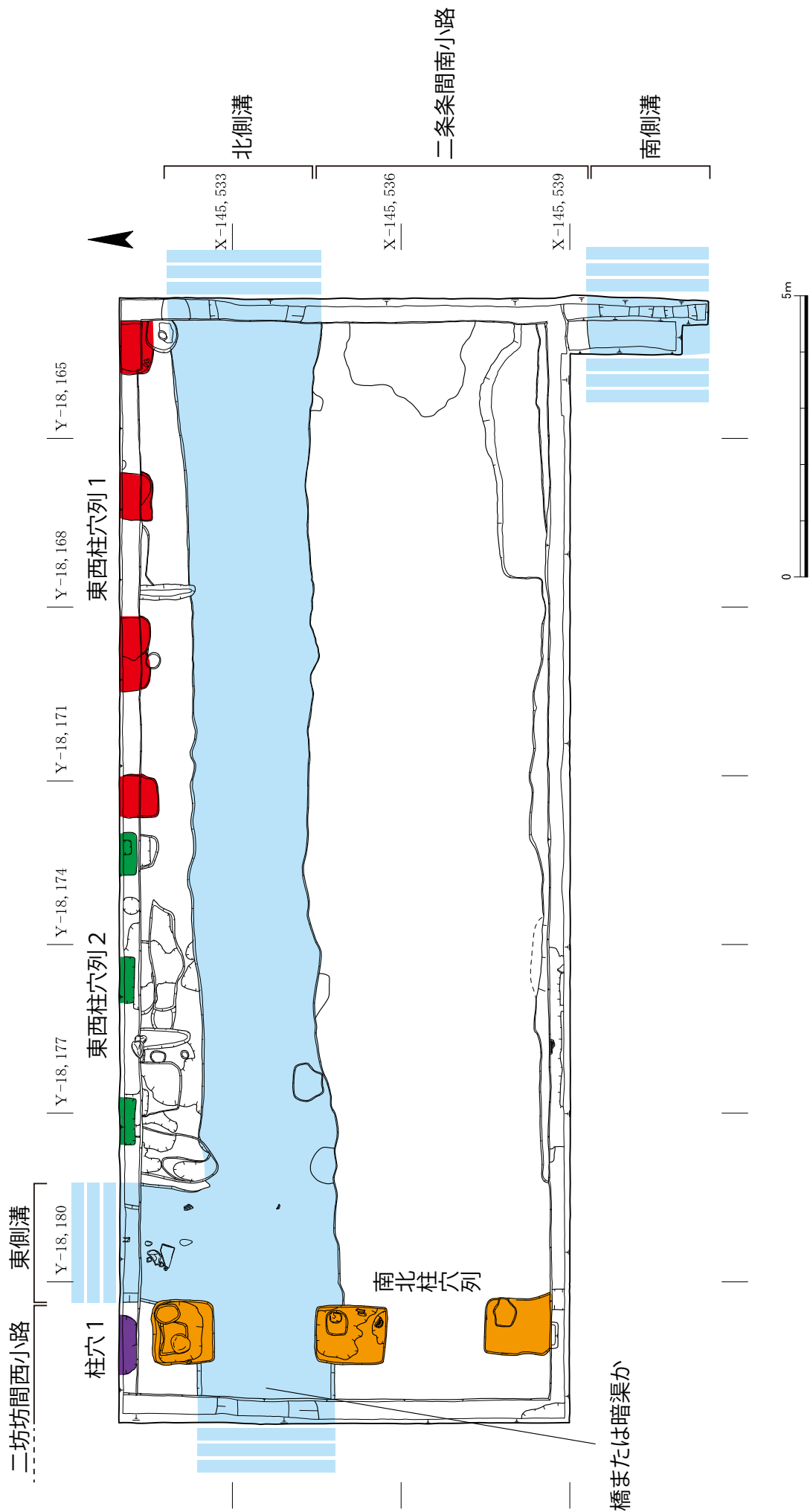


図 3 調査区平面図 1 : 1 0 0